

### 音量を変えずに室内の音圧を少し下げる工夫

これは、当たり前と言えれば当たりの事ですが、当該室のドアを開け放ち隣室と音響的に連結するという事になります。

例えば8畳の当該室にスピーカーが在り、隣室も8畳だとします。

大体8畳の部屋には約40kgの空気がありますので、この2室を連結するとスピーカーは40kgの空気ではなく、その倍の80kgの空気を振動させる事になります。

つまり当該室の音エネルギーを隣室へ逃がすことにより、当該室の音圧を下げる事が出来ます（フツフツは当該室のドアを閉めて音エネルギーを閉じ込めますが）。

では一体どの位当該室の音圧は下がるのか？ それはおそらく3dB位だと思われます。

さらに隣室の隣室がある場合で3部屋を連結出来るなら、これも連結してしまうとよいでしょう。3部屋が全て8畳なら当該室の音圧低下は5dBといったところです。

極論になりますが、家の部屋を全て連結してしまえば特大のオーディオ・ルームが出現するという次第。

さて、この3dBとか5dBの意義ですが、「等身大の音量」（別紙参照下さい）近辺ではかなり大きな影響があります（アンプの音量ボリュームでいうと30分とか45分に相当）。アナログ再生をしている場合、この違いでサウンドの風景というか景色が変わる可能性が高いからです。

私の処の遮音設計では音源の音圧が90dBZという設定になっています。

これはアップライト・ピアノの最大音圧が90dBZ程度だからなのですが、アナログ音源の再生の場合、実はもう少し音圧の余裕が欲しいのです。瞬間的なピーク値で100dBZ出せれば文句なしですが、95dBZでも何とか許容出来る範囲になります。

また、この3dB~5dBというマージンは当該室から外部へ出ていく音圧の低下にも利用出来ます。

ただし、この工夫（方法）は家に家族が不在の時に限るわけで、常に利用出来るという訳ではありません。